

山頭火ふるさと館報

第13号
令和6年10月

「山頭火ふるさと館」

一般社団法人防府観光コンベンション協会
山頭火ふるさと館
館長 大本 学司

志をはたして、いつの日にか帰らん
山は青きふるさと、水は清きふるさと
文部省唱歌「ふるさと」(高野辰之作詞・岡野貞一作曲)の三番の歌詞である。今から一〇年前、大正三年に唱歌六年用として作られた。山頭火が萩原井泉水の主宰する「層雲」にて、初めて投稿句が掲載され、俳号に「山頭火」という号を使い始めた頃である。

私はこの三番の歌詞を歌うたびに何とも言えない郷愁の念に駆られる。そして、山頭火を思うとき、「山頭火もきつと志をはたしてこの防府の地に帰ってきたかったのではないか」と思いを寄せる。山頭火はふるさとへの思いを多くの句に残している。

雨ふるふるさととははだしであるく
(昭和七年九月)
しぐれの中、衣を絞りつつはだしで歩く、雨

のふるさとを足の裏から味わっているその姿に、ふるさとをこよなく愛した山頭火の思いを感じる。

ところで、令和三年十月に防府市制八十五年を記念して、山頭火ふるさと館東側に建立された句碑がある。

日の落ちる方へ水のながれる方へ

ふるさとをあゆむ

(句碑寄贈・揮毫 塚原 明 様)
この句は、昭和九年十一月二十一日、山頭火が防府天満宮の御神幸の日に、其中庵から防府を訪れた際に詠んだ句で、生まれ育ったふるさとの風景を懐かしみながら歩いている様子を詠んだものである。この日の日記には「宮市は私の故郷の故郷である。」と記されており、ふるさとへの愛着の深さを感じる。

うぶすなの宮はお祭りのかざり

(昭和七年八月)

山頭火が防府天満宮のご誕辰祭に来て詠んだ句である。「うぶすな」とは「産土」と書き、自分の生まれた土地のことを言う。

今年の七月末に防府市観光振興課が、防府天満宮周辺にタペストリーを設置し、この「うぶすなの宮」の句を「山頭火の俳句」としてうめてらす北駐車場脇の街灯に掲げている。山頭火にとつてのふるさとの情景は天満

目次

館長挨拶	1
企画展 新収蔵品展	2
企画展 山頭火と『層雲』の仲間たち	3
前期展示	3
寄稿 拓本と私	4
収蔵資料紹介	5
今後の企画展情報	6
今月の一句アーカイブ	7
図書・資料受け入れ報告	7
イベント情報	8

宮のお祭りの情景なのであろう。

山頭火の最期は「ころり往生」を願った松山の地ではあったが、山頭火の魂はこよなく愛したこのふるさと防府で眠り、山頭火が「故郷の故郷」と思いを寄せたこの宮市の地に「山頭火ふるさと館」が建てられている。

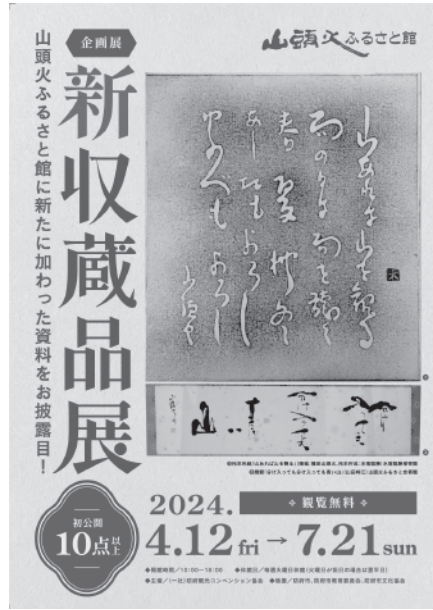
私には密かに願っていることがある。今、市内の小中学生が「ふるさと学習」の一環として「山頭火ふるさと館」を訪れている。彼らは自分の志をはたすために一度はこの防府市を離れることになるかもしれない。しかし、いつの日か志をはたして、または志をはたすために、生まれ育ったこの防府市に帰ってきてほしい。そして、「山頭火ふるさと館」での学びが、大人になって「ふるさと防府」を思い起こす大切な場所となるように働きかけていきたい。そして、それが「山頭火ふるさと館」の発展にもつながると考えている。

企画展 新収蔵品展

開催期間

令和六年四月十二日(金)

～七月二十一日(日)



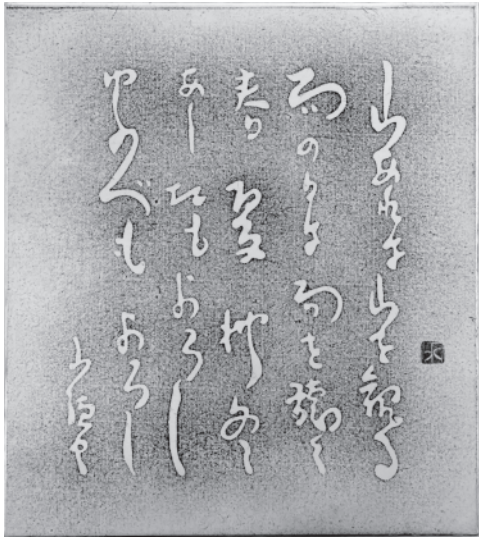
山頭火ふるさと館では、山頭火や自由律に関するさまざまな資料を収集し、後世に残すべく保存しています。今回は、そのうち近年新たに収蔵した資料をお披露目しました。市内ゆかりの俳人の句、山頭火の句を書や絵画で表現した作品、山頭火と関わりがあった俳人の句など、当館に集まる貴重な資料の数々をご覧くださいました。

企画展の開催に当たり、以下の方々にご協力いただきました。謹んで謝意を表します。(敬称略、順不同)

窪田光一
田村悌夫

橋本隆道
水落龍勝
片岡泰鳳
戸田勝
山田梓江
兼崎地橙孫頭彰会

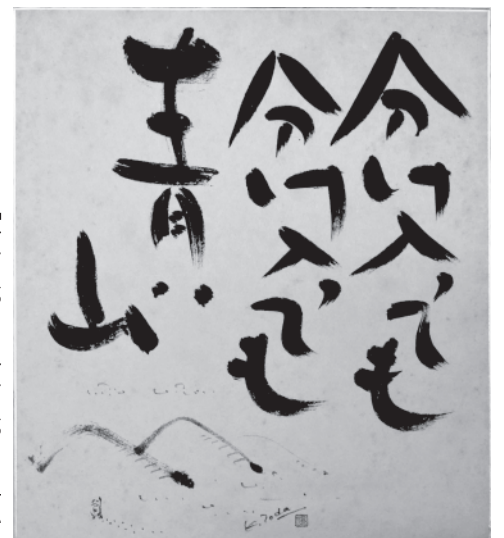
【展示資料一覧】すべて山頭火ふるさと館蔵
 短冊「湯豆腐や陸奥の妓の泣き黒子」(高橋飄々子)、
 短冊「藪深し啄まれゆく柿のこる」(桑原東寧)、短冊
 「遠島も正月ならん島動かず」(宇多村壺天洞)、色紙
 「分け入つても分け入つても青い山」(戸田勝)、色紙「ふるさととは遠くして木の芽」(小崎侃)、掛軸「うどん供へて母よわたくしもいただきます」(山頭火句)(近木圭之介)、半紙「雪ふるひとりくゆく」(大山澄太)、色紙「忘れようとするその顔が泣いてゐる」(和田健)、拓本「山あれば山を観る」(種田山頭火揮毫、水落龍勝作成)、扁額「分け入つても分け入つても青い山」(山田梓江)、色紙「笠ほつとり椿だつた」(片岡泰鳳)、短冊「冬嶺秀孤松」(河東碧梧桐)、短冊「と見れば若き月落ち急ぐ也」(荻原井泉水)、短冊「野に老いてひそかに見たり冬の虹」(兼崎地橙孫)、短冊「藪道を出て田の鶴と顔合はず」(亘理寒太)、掛軸「風狂気匂う背 最晩年の山頭火」(近木圭之介)



▶ 拓本「山あれば山を観る...」
(水落龍勝寄贈)



▶ 展示風景



▶ 「分け入つても分け入つても青い山」
戸田勝(山頭火ふるさと会寄贈)

企画展 山頭火と『層雲』の 仲間たち

前期展示

会期 令和六年七月二十六日(金)

～九月二十九日(日)～



荻原井泉水が主宰した自由律俳誌『層雲』には全国から多くの同人が集まりました。種田山頭火も『層雲』同人として活躍し、『層雲』を通じて同人たちとの交流を広げました。今回は山頭火が交流をもった全国の『層雲』の仲間たちを、それぞれの作品やエピソードとともに紹介しています。

前期展示では、『層雲』主宰の荻原井泉水(せいせんすい)、新潟の写真家小林銀汀(ぎんどう)、天折の自由律俳人野村朱麟洞(しゆりんどう)、平生町生まれ・周南市で活躍した久保白船(はくせん)、田布施町の江良碧松(へきしよう)、光市ゆかりの大前せい一、山頭火の

遺稿をまとめた大山澄太(すみた)、京都の陶芸家内島北朗(ほくろう)、鎌倉の巢山鳴雨(めいう)、長野の関口父草(ふそう)、山形の和田秋兔死(あきとし)、浜松の医師内田六楼(ろくろう)、晩年の山頭火を支えた高橋一洵(いちじゆん)の十三人を取り上げました。

企画展(前期)の開催にあたり、以下の方々にご協力いただきました。謹んで謝意を表します。(敬称略・順不同)

- 護国寺
- 神奈川県立神奈川近代文学館
- 小林由美子
- 田布施町郷土館
- 平生町歴史民俗資料館
- NPO法人まつやま山頭火倶楽部

【前期展示資料一覧】

短冊軸装「水に影も茂る木の茂るまゝ秋(菅沼にて)／火うつる空のこゝには夜半の柩を守り」(荻原井泉水・護国寺蔵)、『層雲』第一巻第三号(明治四十四年七月・層雲社・当館蔵)、写真複製「種田山頭火肖像(小林銀汀撮影・当館蔵)、写真「小林銀汀肖像(個人蔵)、『層雲』第二十五巻第一号(昭和十年・層雲社・当館蔵)、短冊軸装「夕立快う睡りに落ちる疲れし身(野村朱麟洞・護国寺蔵)、短冊軸装「貯水池へ行く道とわかれて暮れて行くに萩(久保白船・護国寺蔵)、色紙軸装「耳に口よせて首がうなづく」(江良碧松・護国寺蔵)、『層雲』第六巻第九号(大正五年十二月・当館蔵)、色紙「冬空掃いて星が出てゐる／百舌鳥に起こされて南天の実もない(其中庵の朝)」(大前せい一・当館蔵)、『層雲』第二十二巻第八号(昭和七年十二月・層雲社・当館蔵)、『愚を守る 山頭火遺稿』(大山澄太・春陽堂・昭和十六年八月・当館蔵)、短冊軸装「釣れさうで黙つて夕焼けてゐる／口笛吹いて沈みたる海女に海青し」(内島北朗・護国寺蔵)、『層雲』第二十五巻第七号(昭和十年十一月・層雲社・当館蔵)、巢山鳴雨宛

て葉書(種田山頭火・昭和十年七月二十四日消印・当館蔵)、短冊軸装「あとにひけない前(ゆく)」(関口父草・護国寺蔵)、『層雲』第二十五巻第八号(昭和十年十二月・当館蔵)、『句集 月山』(和田秋兔死・昭和六年四月・層雲社・当館蔵)、短冊軸装「枯木空へ晴れて朝の子が来る」(内田六楼・護国寺蔵)、『層雲』第二十四巻第八号(昭和九年十二月・層雲社・当館蔵)、掛軸「おたとも或る日は来てくれる山の秋ふかく」(種田山頭火、高橋一洵・当館蔵)、『層雲』第三十巻第六号(昭和十五年十月・層雲社・当館蔵)



▶ 展示風景

寄稿 拓本と私

当館で開催した「句碑拓本ワークショップ」で講師としてご指導いただいた水落龍勝先生による寄稿です。

筑紫拓本研究会

会長 水落龍勝

拓本は、石や金属の凹凸に濡れた紙をあててそれを写し出したもの。つまり、コピーなのだが、単なるコピーにとどまらない奥深いものがあります。「実物の通り一分のごまかしもなく文字や線が現われてくると同時に同じものは二度とつくれないというのが拓本の面白いところです。」

俳人・種田山頭火を知らない私が句碑採拓の許可を防府市役所に御願いに行き、担当者の田中四郎さんに出会いました。山頭火句碑来歴をいただき、防府市内を案内、散策をしました。北九州関係の句碑採拓も一緒にしました。その後「防府種田山頭火研究会」会員の書道家・富永鳩山先生、護国寺・橋本隆道住職、女山頭火・清水八重子様に出会いました。金光酒造今井茂社長には「酔うてこほろぎと寝ていたよ」の句碑をいただき、山頭火や新酒を飲む会に誘っていただき、近木圭之介先生と何度も参加し、酒蔵で美味な「山頭火」を多くの方の方と楽しく語り合い飲み明したのを思い出し、多くの方との出会いあ

り、指導していただきました事、感謝申し上げます。

俳人・種田山頭火の、五七五にとられない自由な俳句と酒を愛する心が好きです。私は「俳人・種田山頭火」は何も知りません、下関市長府の近木圭之介先生(明治四十五「一九一二年」〜平成二十一「二〇〇九」年)より教えていただいた山頭火像です。近木先生宅の「へうへう」として水を味う「山頭火句碑を何枚も採拓し軸装し、多くの方に喜んでいただきました。近木先生宅には月に五〜六回は遊びに行きました。近木先生と奥様二人で居られ、奥様は身体の具合が悪く二〜三回程しか逢ってはいませんが、近木先生と私の声が聞こえる様にと居間で話していましたが、後には玄関横の書齋に替わりました。近木先生はいやな顔もせず、やさしい心使いで迎えてくれて、昼から酒を飲み、楽しい日々を過ごしました。近木先生の拘わりの一つに、コーヒーの入れ方がありました、お湯は時間を掛けゆつくりと注ぐこと、急いではいけない、待ちました、美味でした。

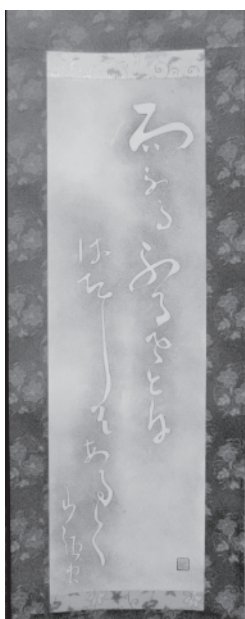
近木先生は山頭火関係の資料を参考にし数多くの説明をして下さいました。近木先生の本には付箋(ふせん)が多くつけてあり大事な個所には赤線が引いてあり、私はそこだけ読めば良いと感じました。山頭火関係の本、近木先生関係の本、山頭火句(圭之介書)、近木先生句(書)、数多くの資料をいただきました。

拓本を通して「種田山頭火翁」・「近木圭之介先生」始め多くのファンに出逢えた事に感謝・感謝・感謝です。

「よき人・よき酒・よき出会い」



▶ 酔うてこほろぎと寝てみたよ 山頭火句 (近木圭之介)



▶ 拓本「雨ふるふるさとにははだしであるく 山頭火」 (種田山頭火揮毫・水落龍勝作成・当館蔵)

収蔵資料紹介

椋鳥会の句会資料「寒月」を取り上げる。

凡例

一、翻刻は原文どおりとしたが、旧字体は現行の字体に改めた。
一、句の上部に記される採点の○印は、句の右側に記した。

寒月(一)

1 敗因語る寒き月町は人寂びて

○シ
2 寒月の道捨て石も君と行く 不泣

○トシ
3 汽艇着くと言ひ戻る宿冬の月 盤

○トバ
4 湯上りを長廊下踏む彼方寒月が 田螺

○トシ田不破
5 月に佇む波止場(ハト)寒う蒸汽波の寄る

石花菜
6 女松枯るゝ里月寒むき湖の風に

7 諒闇中の廓の寒月ヒソと照る

8 ヒヨロ長の並木道寒月の旅もして

9 砲台に冬の月出づ胴船荷蒿高

○ト
10 寒月や路次口浪に横町ある 盤翠

11 女人禁制の僧房の灯揺れ寒月に

12 小刻の足音や寒月に閉づる窓

(二)

○シ

13 不変航の岬月寒むき暗礁に 杉六

○トバ不破
14 廢礦を何普請月寒う建つ 石花菜

○ト田破

15 叛乱の迷ひ艦に船渠の月寒し

16 徹宵鍛冶もあり場末行く冬の月 不泣

17 芝居果てを顔うづめて老母寒月に

18 急ぎ過ぐ田舎町高う月冴えて

○ト田
19 大売り出しのビラ寒月の踏切に 秋芳

20 寒月や屠所辺り飼ふ牛吠えて

21 忘れ足袋納れに寒月も見て汽笛鳴る

22 古器発見を博士来し小山寒月が

23 渡船待つ寒月に殺人犯話など

○トバ破
24 葯蕪踏む寒き月主は来客に 鳥城

○トバ
25 君の泣かぬが物足らじ別れ冬の月 不泣

26 楮干す水車小径に冬の月踐む

27 寒き月を入れる夜隣り鍛冶も出来

○トシ田不破
28 寒月の浜伝ふ洲宮刷ける靄 石花菜

29 寒月に仮り緒の撞木鐘射ても

○ト
30 炭俵昂騰を坑閉づる久し冬の月 盤翠

31 山端廻れば長者の白聖月冴ゆる

32 瓦場の居残り煙や冬の月低う 檳榔

○トバ不破

33 工場夜業の湯気吐ける池冬の月 盤翠

34 寒月や笹鳴く墓地に狂女見し

○ト
35 山女出でゝ梳る谷冬の月に更け 破口栓

36 唄は酌婦か床に聴く路上寒の月も言ひて

○ト田

37 寒月に塩除作業急く素倉

○破
38 夜潮高鳴る宿寒う戸漏れ月光が 石花菜

39 事あるを出でし門ポプラ月寒し 石花菜

40 沼埋める日など月寒むに藁煙ぶ

41 観象に寒き月眠る家々が

○トバ
42 餅つく夕天窓に寒月も見て 秋芳

○トシ田不破
43 築港広地の貯材場遠見月冴ゆる 不泣

44 飛瀑直下を冬月に身顛ふ男あり

45 寒月や妻が宵鶏に汲む釣瓶

46 孤島飛はざること二年冬月を眺む

○
47 休み工場にかくれしは猫か尾を冬の月

○トバ不破
48 樹海風も眠る夜半寒の月マザと 破口栓

49 寒月や雪チラ弟子が徳提て

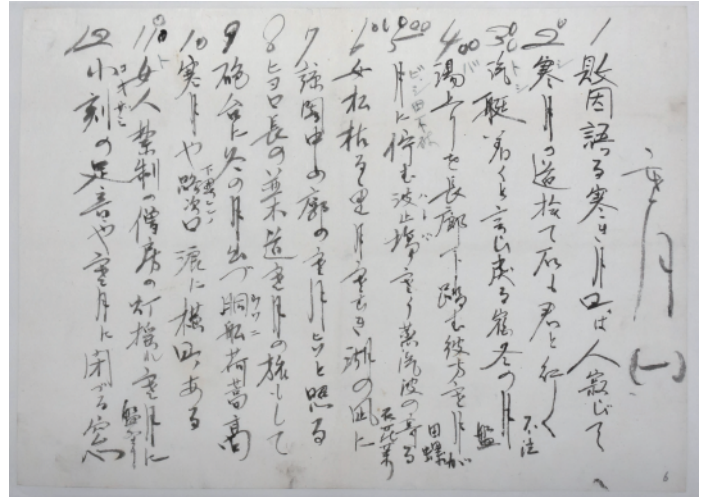
50 寒月や売山掲示ある酒庫

51 鳴火事も船路より寒月の西燈

(採点表省略)

磐翠	杉文	秋芳	鳥城	石花菜	不泣	香齋	檜柳	鐘眠	破口栓	作者
										破口栓
										鐘眠
										檜柳
										香齋
										不泣
										芳翠
										秋芳
										磐翠

▲採点表



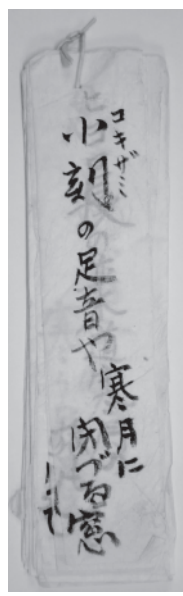
▲句会資料「寒月」一枚目

解説

大正初期に防府を中心に活動していた俳句結社「椋鳥会(むくどりかい)」の句会資料。成立年は不詳であるが、山頭火が旧号「田螺公」を使用しているため、改号する大正二年三月より前だと推定できる。

採点表によれば、出句者は久保破口栓(白船)、種田田螺公(山頭火)、斎藤鐘眠、守富檜柳、登龍門、浴永不泣、宇賀石花菜、小田鳥城、石川秋芳、秋本杉六、梅田磐翠の十一名で、参加者は破口栓、田螺公、鐘眠、檜柳、登龍門、不泣、秋芳、盤翠の八名。最多得点は石花菜の十三点で、山頭火は4の句で二点得点している。

参加者は現在の防府市の人が多いが、白船は平生町佐合島から参加している。
当資料には採点表のほか、鳥城、杉六、石花菜の提出原稿が一枚ずつと、採点用に全員の句を清書するための短冊束(三十七句分)が付属している。(山頭火ふるさと館 学芸員 高張優子)



▶ 付属の短冊束

今後の企画展情報

企画展「山頭火と『層雲』の仲間たち」
後期展示 令和六年十月四日(金)
〜十二月八日(日)〜



前期展示に引き続き、山頭火と交流をもつた『層雲』の仲間たちをご紹介します。企画展後期では、前期とは異なる人々を取り上げます。

企画展「自由律俳句で味わう四季」
令和六年十二月十三日(金)

〜令和七年四月六日(日)〜
自由律俳句は五七五のリズムや季語を必要としない俳句ですが、季節感が感じられる句は多くあります。この展示では、季節を感じるさまざまな俳句を紹介し、自由律俳句を通じて四季を味わっていただきます。

今月の一句アーカイブ

山頭火ふるさと館では毎月山頭火の句を一句選んで皆様にご紹介しています。これまでにご紹介した「今月の一句」を振り返ります。

令和六年

四月 あるがまま雑草として芽をふく

昭和十年 日記で自らを雑草のようだと言うこともあった山頭火は「雑草」に対して深い思い入れをもっていました。「あるがまま」生命力豊かに伸び、咲き、実り、枯れていく様が、山頭火には理想の生きざまに思えたのかもしれない。

五月 ゆふべしめやかな土へまいてゆく

昭和八年五月 小郡の其中庵で山頭火は、畑を作り野菜を育てていました。掲句の「しめやかな土」は、しつとりと水分を含んだ柔らかな畑の土を表現する一方で「ゆふべ(が)しめやか」とも解釈でき、静かでゆつたりとした時間の流れる夕方、という印象も与えます。

六月 蜘蛛は網張る私は私を肯定する

昭和九年六月 旅先で肺炎を患い、小郡に戻ってきてから一ヶ月が過ぎた頃に詠んだ句です。日々自省を繰り返す、時には「生きてゐたくない」と思うこともあった山頭火ですが、網を張り殺生

をすることを肯定して生きていく蜘蛛から、どうしようもない自分を肯定しながら生きていくことを教えてもらっているのかもしれない。

七月 てふてふひらひらかをこえた

昭和十一年七月 山頭火は昭和十年末、「死に場所」を求めて旅をし、不安定な精神状態で帰途につきまされたのが掲句です。実際に山頭火の目に映ったものではなく、心象風景の句であると考えられ、死から生への方向転換を、いらかを越えて飛ぶ蝶に託して詠んだと考えられます。

八月 むしあつく遠雷いちにち

昭和十五年八月 松山一草庵での句。掲句は無駄な語がなく、的確な言葉選びで一句の情景を描写しています。「むしあつく」という語によって空気感が、「遠雷」によって空間の奥行が、「いちにち」によって時間の幅が、「とどろとどろ」によって音が伝わってくるようです。

九月 いつまでもねむれない

昭和八年九月 其中庵は東向きに建っており、其中庵から見て月が後ろにまわるというのは、月が西に傾いたことを表現していると考えられます。掲句は、夜が更けても眠れないと詠んだ句だと言えます。

図書・資料受け入れ報告

令和六年四月から八月までの間に寄贈いただいた資料をご紹介します。

寄贈

○池原道子様より短冊「旅は笹山の笹のそよぐのも」(種田山頭火)

御著編書

- 自由律俳句協会様『自由律俳句協会機関誌 自由律の風』第六号
- 「青穂」事務室様『青穂』五十二号、五十三号
- 高橋正治様『山頭火 人生即遍路』
- 富永鳩山様『自由律俳句クラブ群妙』三十六号



◆これまでのイベント◆

4月	1日	第6回フォトコンテスト作品募集開始(～10/31)	8月	1日	書道コンクール作品募集開始(～9/6)
	29日	うめてらす誕生祭コラボプレゼント		14日	自由律句を学ぶ会
5月	1日	第7回自由律俳句大会作品募集開始(～10/31)	9月	21日	山頭火を学ぶ会
	4日	親子でワークショップ ～さらさらサンドアート体験～		24日	講演会「山頭火と『層雲』の仲間たち」
6月	1日	雨の日企画(～7/21)	11日	自由律句を学ぶ会	
	12日	自由律句を学ぶ会	18日	山頭火を学ぶ会	
	19日	山頭火を学ぶ会	28日	自由律句で遊ぼう	
	22日	自由律句で遊ぼう			
7月	10日	自由律句を学ぶ会			
	17日	山頭火を学ぶ会			
	27日	自由律句で遊ぼう			

◆これからのイベント（予定）◆

10月	5日	第3回山頭火ふるさとまつり 防府商工生によるスイーツ販売	11月	13日	自由律句を学ぶ会
	5日	書道コンクール表彰式		16,17日	コリントゲームで遊ぼう／山頭火おみくじ (すごいぞ！防府 秋の大イベント)
	6日	第3回山頭火ふるさとまつり あつまれちびっ子！山頭火謎解きゲーム 朗読劇「山頭火の妻 サキノ」		20日	山頭火を学ぶ会
	9日	自由律句を学ぶ会	12月	23日	コリントゲームで遊ぼう
	16日	山頭火を学ぶ会		7日	第6回フォトコンテスト表彰式
	26日	自由律句で遊ぼう		18日	山頭火を学ぶ会
				21日	自由律句で遊ぼう
			25日	自由律句を学ぶ会	

山頭火ふるさと館報

第13号

令和6年10月1日発行

編集・発行

一般社団法人

防府観光コンベンション協会

山頭火ふるさと館

747-0032

山口県防府市宮市町5番13号

電話 0835-28-3107

FAX 0835-28-3113

駐車場

普通車用三台、身障者等用二台(ふるさと館横)
無料観光駐車場二十五台(ふるさと館斜前)

アクセス

防府駅てんじんぐちから約一・五km
まちの駅「うめてらす」から約一〇〇m
山陽自動車道防府東・西ICより約七分

※なお、特別企画展を開催する際、観覧料を設ける場合があります。

観覧料

無料

休館日

毎週火曜日(祝日の場合は次の平日)
十二月二十六日～十二月三十一日まで

開館時間

午前九時～午後五時
(ただし、特別企画展の開催中は、展示室への入室は午後四時三十分まで)

山頭火ふるさと館のご案内